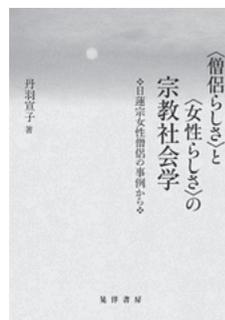


◆書評◆

丹羽宣子著

『〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の宗教社会学  
日蓮宗女性僧侶の事例から』

(晃洋書房 2019年 ISBN 978-4-7710-3114-2 4200円)



小林 奈央子

(愛知学院大学 文学部宗教文化学科)

本書は、著者が2016年度に一橋大学大学院社会学研究科に提出した博士論文に加筆修正を施し書籍化したものである。「現代日本社会において『女性が僧侶として生きるということ』を、経験的資料収集によって記述・解明」(i頁)し、「多様な背景と、様々な属性をもつ女性たちが僧侶として活躍している社会的事実」をふまえ、女性僧侶たちを「同時代の社会的文脈とともに記述すること」を目的としている(ii頁)。

ここでいう多様な背景や属性を持つ女性の僧侶というのが、非婚で剃髪、尼寺で暮らす「伝統的な尼僧」のイメージとは異なる、女性僧侶たちのことである。本書では、未婚や既婚、有髪、あるいは剃髪しながらも「出向く場や対面する相手」に合わせてウィッグを使用する人などを含む11名の日蓮宗の女性僧侶へのインタビュー調査を行っている。

そのインタビュー調査のデータと、2004年に日蓮宗現代宗教研究所から発刊された

「日蓮宗全女性教師アンケート報告書」のデータを併せて用い、分析の視点として、「(1)「問題経験」への着目、(2)女性僧侶を宗教的場面と生活者としての場면을横断的に描くこと」の2点を挙げる(14頁)。インタビュー調査については、「人生という時間軸における出来事の連続性に着目し、ライフステージの移行による経験の意味の変化を明らかにする」ライフストーリー法を採る(13頁)。

タイトルの〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉については、宗教活動と日常生活、すなわち、教団の内と外の両方に関与しながら生活する女性僧侶たちが、「社会から求められる役割の内面化であり、自己表明のためのコード」であるとする。そして、この〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉は「自己を貫こうとする際に生じる社会や他者との衝突や葛藤の火種」であるゆえ、女性僧侶の教団内社会を「教団外社会とともに描きだす視角が求められる」とする(16頁)。

以上のような研究目的と視点にもとづく本書であるが、紙幅の都合上、各章の内容を詳細に記すことはできない。以下、いくつかのポイントとなる記述を紹介し、評者が気になった点を挙げたい。

本書の中心となっているのが、第3章から第5章の若手女性僧侶3人のライフストーリーである。三者三様の境遇と語りはそれぞれに興味深く、また、経年による考え方のゆらぎや変化まで追っており、1人ひとりのまさに「人生の物語」(61頁)の一端を垣間見た気がした。また、「剃髪」という行為、そしてそれに伴うウィッグの使用にかかわる女性僧侶たちの赤裸々な心情も表されていた。その点では、「伝統的な尼僧」とは異なる女性僧侶の日常生活を含めた現実を描くとした著者の目的(11頁)は達成されている。

しかし、「剃髪・無化粧の〈僧侶らしさ〉」(7頁)、「〈女性らしさ〉の基準から大きく逸脱する剃髪姿」(16頁)といった表現や、教団内社会が求める〈僧侶らしさ〉、そして、教団外社会が求める〈女性らしさ〉のように、著者が〈らしさ〉を自明のものとして捉え、本質化して論じることには違和感を覚えた。〈らしさ〉に基づき行動すること自体が問題なのではなく、そうした〈らしさ〉に見合った行動をとらないと周囲に認められない、女性僧侶の周縁化された構造にこそ目を向けるべきであろう。評者は、第5章で取り上げられたCさんの「お坊さんの世界は男社会」であり、「粗相はしては

いけない」、「常に、なんにも楽しくないけれど、まず笑顔」、「『減点されないように』普段から作務衣に剃髪、無化粧」、「優しく見えるような化粧をし、笑顔で、食事の席ではあえて馬鹿を披露する」(116-121頁)という語りを読んで辛くなった。これらCさんの「男社会」に対する振る舞いを、著者は、Cさんが別の語りの中で用いた「巧みな手段」(118頁)という言葉と結び付け、Cさんが「巧みな手段」を採ることは、「現実にある性差別を温存することとして批判されるべきであろうか」(138頁)と投げかける。しかし、そもそもこれを「巧みな手段」として積極的に把握してもよいものなのだろうか。

同様の懸念はほかでも見られる。第4章で取り上げられたBさんは、母親としての経験を活かし、地域の母親や子どもたちに寄り添った布教活動をしている。著者はこれを「〈女性らしさ〉を活用し」「戦略」として用いた(193頁)としているが、「代わりに」で紹介されたBさん自身の言葉には、「私の活動を戦略的と丹羽さんは表現されていますが、戦略ではなくそれしか私には出来ないからです」とある(202頁)。

このBさんの言葉の引用に先立ち、著者自身「女性僧侶たちの声を過剰に引き出してしまったこともあった」(201頁)と自省しているが、もとより女性僧侶たちの心の奥底にあったものを「過剰に引き出した」だけなのだろうか。著者の執筆の意図に従って、恣意的に結び付けられた可能性は

ないのだろうか。そのように見ると、本書で示された、女性僧侶が「宗教的主体性を発揮するための回路として」(17頁)〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉を活用しているという前提自体がゆらいでくる。

だが、〈女性らしさ〉の活用によって、女性宗教者が主体性を発揮している、あるいは、女性特有の役割を担うことで自己充足感を得ているとする研究は、本書のみならず、近年欧米の日本宗教研究者にも散見される。そして、こうした研究がもてはやされると、実際には存在するジェンダー不平等の現実が不可視化するおそれがあるとされる(川橋2019:45)。さらに、不平等の是正などを主張しないこうした研究は、教団関係者や男性研究者にとって好意的に受け取られ、歓迎されやすいものとなっている<sup>1</sup>。2020年2月、本書に奨励賞を授与した国際宗教研究所の役員もほとんどが男性研究者と宗教者から成る。受賞を知らせる記事には「従来のフェミニズム的視点を踏まえながらも、それに留まらない新たな女性

僧侶研究を切り拓こうという意欲」に満ちていると評されたとある(『中外日報』2020年3月6日付)。しかし、女性の周縁化や男性中心主義への批判的視座があつてこそそのフェミニズム研究というところからすれば、本書がフェミニズム研究の蓄積を踏まえて新たな地平を切り開いたものであるとは認めがたい。むしろ、本書のような研究がもてはやされることによって、従来のフェミニズム研究が積み上げてきたものが等閑に付されることのないよう願う。

日蓮宗における直近の定期宗会では、女性議員から女性が活躍しやすい環境整備を訴える発言が相次ぎ、女性教師を増やすために、教師資格が得られる信行道場への有髪入場を認めて欲しいとの意見も出たという(『中外日報』2020年3月27日付)。著者にはこうした教団全体の動向も踏まえ、女性僧侶の個々の経験や語り「個人のライフストーリー」で終わらず、より有機的な視点へと結びついていくような研究を期待したい。

## 参考文献

川橋範子, 2019, 「ジェンダー論的転回が明らかにする日本宗教学の諸問題—ウルスラ・キングとモーニィ・ジョイを中心に—」『宗教研究』93(2), pp. 241-265.

1 『週刊仏教タイムス』(2019年12月12日付)の「今年の3冊」の1つとして塚田穂高が本書を「新鮮」と評して推薦している。川又俊則は本書の書評のなかで、本書が『月刊住職』などの業界誌に与えた影響に言及している(『社会学評論』70(4)、2020年)。